UR都市機構の情報誌 ● ユーアールプレス

UR PRESS

2012 vol.29

震災復興特集号

特集 東北に響く、復興の槌音

巻頭言 写真家 立木義浩

▼Special Interview

建築家 坂 茂
紙を素材にアイデアを凝らし
避難所、仮設住宅に「快適さ」を

詩人 和合亮一
被災地の思いを発信し続け、
共感を広げる「言葉の力」

街に、ルネッサンス
UR 都市機構

みんなで止めよう温暖化
『UR都市機構』チーム・マイナス6%

再生紙を使用しています

UR都市機構の情報誌●ユーアールプレス
UR PRESS
2012 vol.29
震災復興特集号

CONTENTS

01 復興へ向かうまちへ、人の声を届けよう。
写真家　立木義浩

03 Special Interview
建築家 坂 茂
紙を素材にアイデアを凝らし
避難所、仮設住宅に「快適さ」を

詩人 和合亮一
被災地の思いを発信し続け、
共感を広げる「言葉の力」

10 特集 東北に響く、復興の槌音

11 URの復興支援

13 女川
地域に寄り添った、
真の復興支援を

17 町長が語る「女川の未来」

19 陸前高田
すべては故郷のために、
その一心で

21 大槌
まちづくりのプロとして
第一線で支援したい

23 塩竈
新たな生活の舞台に
多くの思いを込めて

26 URからのお知らせ
編集後記

表紙写真 = 立木義浩
崩壊を免れた家屋の前で津波を食い止めたかに見える
けなげな桜
（2011年4月28日、宮城県気仙沼市）

巻頭言

復興へ向かうまちへ、人の声を届けよう。

写真家
立木義浩――文と写真

津波で大破した防潮堤を臨む海岸で（岩手県宮古市田老町）

２０１１年３月11日、東日本を襲った大地震、そして大津波。この未曾有の災害は、私たちに〝革命〟とも呼ぶべき変化を起こした。

〝革命〟といっても、手に手に石を持ち騒ぎ立てる類のものではない。一人一人の心の中で、静かに、しかし確実に進行していく変化のうねりだ。

例えば一枚の風景写真がある。以前には、「ただ美しいだけの平凡な景色」に見えていたものが、ある一瞬を境に、「二度と目にすることができない特別な光景」に変わる。大災害に遭遇するとは、まさに、そういうことなのだ。

震災の８日後から、時間と、ガソリンの許す限り被災地を訪れてきた。４月末、気仙沼の高台に辛うじて残った民宿へ泊まったときだった。街灯の消えた暗闇を走って宿に着いたため、翌朝になって窓から見た気仙沼の風景に思わず息をのんだ。ざっくりと根こそぎ奪われた日常。波の音だけで、生活の音がまったくしない。この無音のまちで、大きな喪失感を抱え、生きていく人たちのことを思った。

復興は、これから長い道のりになるだろう。個人で出来ることなどわずかに過ぎない。しかし世界は些事の積み重ねでしか動かないものだ。私は被災地に行き、写真を撮り、夜は人と酒を酌み交わして語らう。「津波の後で、ワカメが大漁だ」「海もちょっとは悪いことしたと思ってるのかね」。そんなさりげないやり取りでも、「にぎやかになってうれしい」と言ってくれる人がいる限り、私は東北を訪れたい。

季節が巡れば、花はまた咲く。子どもたちは海で遊ぶ。自然の営みが営々と続くように、人間も暮らしを築いていこう。一日一日を、この一瞬を、何より愛しく大切なものと感じられる〝心の革命〟を続けながら。

Yoshihiro Tatsuki

1937年徳島県徳島市生まれ。実家は、NHK朝の連続テレビ小説『なっちゃんの写真館』のモデルとなった立木写真館。東京写真短期大学（現・東京工芸大学）卒業。女優写真の第一人者として知られ、広告・出版・映像など幅広い分野で活躍。1995年の阪神・淡路大震災で被災地を取材撮影。2011年東日本大震災の被災地にも足繁く通い、復興に尽力する。

建築家 坂茂（ばん しげる）

紙を素材にアイデアを凝らし 避難所、仮設住宅に「快適さ」を

世界を舞台に活躍する建築家であると同時に、トルコ、インド、スリランカ、ハイチなど各国の被災地で住宅や学校を建てる支援を続ける「行動する建築家」、坂茂さん。
避難所にプライバシーを確保する「間仕切り」を。
仮設住宅に「美しさ」と「快適さ」を。
不可能とも思える挑戦を支え、突き動かしてきた思いとは。

坂さんが建築設計を手がけた女川町の仮設住宅。その住練間につくられた「紙のアトリエ」は、ボランティアによる各種教室や、遊び場として開放している
©Hiroyuki Hirai

難民シェルターから被災者支援へ

紙を素材にした優美な建築物を設計し、世界的な評価を受ける建築家・坂茂さん。フランスの国立美術文化センター「ポンピドゥー・センター・メス」といった国家的プロジェクトを手がける一方、世界各地で起きた自然災害現場へいち早く駆けつけ、ボランティアで仮設住宅や学校を建設するなど「行動する建築家」としても知られる。

「僕が学生時代に建築家を目指したのは、『人の役に立つ仕事ができる』と思ったから。しかし実際になってみると、建築家の仕事の多くはお金持ちなど特権階級の人達のためのものでした」

建築家としての自分の知識と経験を、住む場所に困っている人たちに役立てられないか。そう考えていた94年、坂さんは雨期のアフリカで毛布にくるまり震えているルワンダ難民の写真を見て、あることをひらめく。

「僕が86年から素材として使っていた再生紙の紙管は、現地調達がしやすく、コストが安く加工も簡単。リサイクルも可能です。強度は木に劣るものの、構造を工夫すれば丈夫な建築物ができるのです」

坂さんは、アポイントなしにジュネーブの国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）本部へ出向き、自説を提案。95年にはルワンダの難民向け仮設シェルターの設計コンサルタントに任命されたのだ。

仮設住宅建設の後、紙管を使って建てた神戸たかとり「紙の教会」
©Hiroyuki Hirai

紙管をシートの支柱に使った、ルワンダ難民キャンプの仮設シェルター（UNHCR）　©Shigeru Ban Architects

紙を使った間仕切りで避難所にプライバシーを

同じ年、日本は阪神・淡路大震災に襲われた。坂さんは紙管を素材に神戸市内の教会に集まった元ベトナム難民に向けた仮設住宅や、教会のコミュニティホールの再建を手がける。

ボランティアとして被災地へ通うなかで、避難所や仮設住宅の抱える問題点にも気づいたという。

「被災して家族を失い、精神的なダメージを受けている方々にとって、住み心地のいい空間を提供することは非常に重要です。しかし今までは『住む場所を用意する』ことが先決と考えられ、生活のクオリティは後回しだったと思う」

その後、04年の中越地震、05年の福岡県西方沖地震で実際に避難所の支援を始めた。プライバシーを保つために用意した紙の間仕切りに対して、「人数の管理が難しくなる」と導入を渋られたことも。

「避難している人も、『お世話になっている身だから』と、文句やわがままを飲み込んでしまう。だからこそ僕のような人間が声をあげ、行政と利用者の間に立って最善の方法を考えなければと思いました」

例えば、中越地震の避難所に用意した家のような形の間仕切りは、閉鎖性は高いが家族の人数にフレキシブルに対応できなかった。間仕切りが高く、避難所である体育館の舞台上に設置されたテレビが見えない、という声もあった。そうした点を改良した福岡の間仕切りは、組み立ては簡単になったものの、プライバシーが保てないという問題が起きた。

「そうした過去の経験を元に出来たのが、紙管で柱と梁を組み立てカーテンを張ったシステムです。

Shigeru Ban

1957年東京都生まれ。80年、ニューヨークのクーパー・ユニオン建築学部入学。途中1年間休学して磯崎新氏の事務所に在籍。85年、坂茂建築設計を設立。2000年ドイツ・ハノーバ万博日本館を「紙の建築」で手がける。1995～2000年、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）コンサルタント。2010年よりハーバード大学、コーネル大学客員教授。2012年、文化庁文部科学大臣賞受賞。ニュージーランド、クライストチャーチ仮設大聖堂が今年秋完成予定。

建築は、希望。人の役に立つ仕事に関わる喜びを感じます。

女川町の仮設住宅全景。仮設住宅としての役割を終えた後は、運動場併設の合宿所に転用予定だ
©Hiroyuki Hirai

©Voluntary Architects Network

©Voluntary Architects Network

©Voluntary Architects Network

右上／東日本大震災で避難所となった岩手県大槌町の体育館。間仕切りが設置される前の状況
左上／間仕切りが設置された状態。改良を重ね、組立式で設置も容易に。夏にはカーテンを蚊帳に替え、被災地で発生したハエ対策に大きな効果を上げた
左／2005年、福岡西方沖地震の際、活用された避難所用間仕切りシステム。この頃はまだ紙のつい立てだった

組み立てるのも簡単で、開閉ができ、紙管の長さを変えればサイズも変えられる。これを、06年の藤沢市防災の日に合わせて開発したのです」

そして2011年3月11日。パリの事務所で東日本大震災を知った坂さんは、すぐさま避難所の間仕切りプロジェクトをスタートする。慶應義塾大学で教えていた時の研究室OBを集め、事務所のサイトを通じて義援金を募った。

「自治体の援助を受けるには、許可がいるとか議会を通すなど、時間がかかりすぎる。その間にも困っている人たちはいるのですから」

間仕切りシステムはさらに改良を重ね、サイズの違う2種類の紙管の太い管の穴に細い管を差し込むことで、コストの低減と、組み立てやすさを実現した。

「サンプルを持って避難所をまわり、実際に避難している人の前でデモンストレーションをしながら『この避難所でも作らせてください』とお願いして回りました」

コンテナを積み上げた美しく快適な仮設住宅

そして今回、坂さんが手掛けた宮城県女川町の仮設住宅。その設計・建築には、次のようないきさつがある。

震災直後の報道から、坂さんは多くの被災地やその周辺地域に、仮設住宅を建てるために十分な平地が少ないことに気づいていた。

「つまり従来の平屋ではなく、多層の仮設住宅が必要になるはずだと。そこで前々から温めていた海上輸送用のコンテナを使った3階建て仮設住宅を、避難所支援で知り合った女川町の安住伸孝町長（当時）に提案したのです」

コンテナを市松模様に組み上げ、コンテナ同士の間のオープンな空間に全面ガラスを入れて開放的なリビングを作る。コンテナ内部はやや閉鎖的なため、子供部屋やバス・トイレに利用する。

「コンテナの数は従来の半分で済む上、屋根との間に隙間をつくることで風通しを良くして夏も涼しい住宅ができます」

構造としては耐火性能、断熱性能、遮音性能も十分に備えている。ただ県の予算を使う関係から、室内の面積は一般的な平屋の仮設住宅に揃える必要があったという。

「これまで見てきた多くの仮設住宅では、十分な収納がないために、家中にモノや衣服があふれていたり、間に合わせの家具を入れたために室内が狭くなりがちでした」

そうした不便を少しでも解消してもらおうと、義援金を元にボランティアが作り付けの家具を製作。ちゃぶ台としてもテーブルとしても使えるように、脚の長さが変えられる食卓も用意した。

明るく広々した室内。上部の作り付け家具の下にはハンガーがかけられ、衣類が収納できるなど細かな工夫も
©Hiroyuki Hirai

「戦後、日本人の住まいの質は大きく向上しました。災害に遭う前の暮らしの質を実現するのは難しいにしても、それ相応に、暮らしやすく快適で、しかも美しい住まいであることが大切だと思います」

物と物に挟まれて小さくなっているような家では、心身の疲れを癒すことは難しい。快適な住まいは、復興に向かう明日への活力になるはずだ。

また住戸一つずつだけでなく、コミュニティとしての快適さも考えたという坂さん。町立の野球場の中という限られた土地であっても、多層構造のため棟間隔は11m余りある。住棟間の敷地には、地方の生活にはなくてはならない駐車場も確保できる。集会所や日常的な買い物ができるマーケットや、子供たちが勉強や遊びに利用するアトリエを備えたコミュニティ空間もつくることができた。

「敷地内に、掘り当てたまま利用されていなかった温泉がありましてね。そこを銭湯にしようと計画中なんですよ」

今回の間仕切りシステムや仮設住宅について、これからを見据えてこう語る。

「間仕切りシステムは、使いやすさでもコスト面でも今回のシステムが最上だと考えています。コンテナを使った多層の仮設住宅も、日本という国土を考えたら、これがベストの形でしょう。もし今後また大きな災害が起きたときは、こうした『前例』をもとに、よりよい住まいを提供していって欲しいと願っています」

建築家としての活動では、2011年にニュージーランド南部地震で被災したクライストチャーチの仮設教会が間もなく完成する。

「町の中心部では90％以上の建物が建て替えを余儀なくされ、景観が失われていくことを人々は悲しんでいます。そこに仮設とはいえモニュメンタルな建物が生まれるのは、『大きな希望だ』と僕に語ってくれた人がいました」

建築は希望。大きな災害に遭っても、人はまた建物を、そして暮らしをつくり上げることができる。被災地での建築に関われる満足感や喜びは、世界的な建築をつくる満足度と、「まったく境目がありませんね」と語る坂さん。「行動する建築家」としての活動は、ますます多様に広がっていきそうだ。

3号棟の外観。パステルカラーで「テーマパークのホテルみたい」と住民たちにも好評だ
©Voluntary Architects Network

詩人 和合亮一

被災地の思いを発信し続け、共感を広げる「言葉の力」

自らも被災しながら、震災直後からツイッターで自作詩を発表してきた和合さん。その「言葉」は多くの共感を呼んだ。14カ月を経ての思いを伺った。

Ryoichi Wago

1968年福島生まれ。詩人、高校の国語教師。1999年に第一詩集『After』で中原中也賞、2006年『地球頭脳詩篇』で晩翠賞を受賞。東日本大震災直後からツイッターで作品を発表する。震災後の詩集には『詩の礫』『詩の黙礼』『詩の邂逅』がある。

震災6日後からツイッターに紡いだ詩

大学時代から詩作を始め、現代詩の旗手として注目されてきた和合さん。震災発生の時は、勤務先である福島県伊達市の高校で会議の最中だったという。立っていられないほどの揺れ。地鳴り。割れる窓ガラス。その晩から家族とともに3日間を避難所で過ごした。携帯電話で見たテレビは、想像を超える被害を刻々と伝えた。

連作「詩の礫（つぶて）」を書き始めたのは、妻子が放射能を避けて山形に避難し（1カ月後に帰宅）、自宅にひとり残った3月16日からだった。

「30世帯もの集合住宅に残っているのは僕も含めてごくわずかの人だけでした。福島はもう終わりかもしれない。けれども僕がここを去るのは、近くに住む両親を看取ってからになるだろうと。そこまで覚悟していました」

激しい余震が続き、また、ニュースを見るたび津波の死者数は増えていく。何度も出かけた三陸の海辺も壊滅した。原発でもっと大きな爆発が起きればどうなるのか。

「本質的な孤独のようなものを感じる中、自分が生きた証を記録しておきたかった。理性ではなくもっと動物的な、強い衝動でした」

紙に記録しても誰の目にもふれないかもしれない。ふと思いついたのが、ツイッターに書き込むという手段だった。

「手続きしたままほとんど使っていなかったんですが。これで発信すれば誰かに届くかもしれないとひらめいたんです」

パソコンに向かい、まさに礫のごとく詩を投げかけた。それは例えばこんな言葉で始まる。

——本日で被災六日目になります。物の見方や考え方が変わりました。放射能が降っています。静かな静かな夜です。

「頭の中は白熱したまま2時間、詩を書き続け、気づいたら171人がフォローしてくれていました」

ツイッターでは気になる人を登録（フォロー）しておけば、その人の投稿（ツイート）をリアルタイムで閲覧できる。翌日から和合さんが綴る詩のフォロワーはみるみる増え、わずかな期間のうちに1万人を超えた。

書いている間にもフォロワーからの感想が次々と送られてくる。

「メッセージを受け取りながら言葉を繰り出していく感覚は、まるで舞台で語っているようでした」

大きな動きにつながり広がっていった輪

3月、4月、5月……和合さんは寝食を忘れて書き続けた。

「皆、つらさを抱えて生きている。福島では見捨てられたようなエリアもある。この不条理な現実をありのまま発信し続けることが大切だと思いました」

ありのままの表現は被災した人たちを苦しませるかもしれない。そう心配した時期もあったそうだ。しかし、避難所で紙に書き写した和合さんの詩が回し読みされ、皆を勇気づけているというううれしい知らせも聞いた。

フォロワーの広がりはさらに大きな動きを呼んだ。ツイッターに綴った詩は、6月に『詩の礫』『詩の黙礼』『詩の邂逅（かいこう）』の3冊として刊行。また8月には福島出身のミュージシャン・遠藤ミチロウさん、大友良英さんとともに発起人になり、音楽を主体としたフェスティバル「プロジェクトFUKUSHIMA！」も開催した。

「当時の福島のまちは本当に閑散としていました。駅も封鎖していたし、ここに人が来るとは思えないとの声もありました。でも皆何かしたかった。それで、よし、1万人を集めよう！と」

多くのアーティストが出演を快諾してくれた。和合さんは、10代の頃から憧れだった坂本龍一さんと共演し、詩を朗読した。来場者はなんと1万3000人。インターネット番組で流した映像は全世界25万人が視聴した。

夏の終わりころ、まちの人から「ありがとう」の声がかけられた。

現代詩は人に役立つために書くものではない。それが文学性であり、詩人の誇り。そう思ってきたと和合さんは言う。谷川俊太郎さんの「詩とはいろんな人に読んでもらうべきものだ」という言葉にもピンとこなかったという。

「震災を経て、ああ、こういうことだったんだとわかりました。詩は人を励まし、役に立つものになり得るんですね」

「プロジェクトFUKUSHIMA!」の一環で、一般応募者を対象に「詩の学校」を開催

「詩の学校」で詩の書き方を指導し、和合さんが各人の詩の一部を抜粋。一つの詩に仕上げたものを「福島群読団」として朗読した

和合さんの近著
『ふたたびの春に』（祥伝社）

特集

東北に響く、槌音

復興の

東日本大震災から1年余り。UR都市機構では、昨年4月以降、被災市町村の要請に応じて復興支援体制を強化してきた。今回の特集では、復興まちづくりに向き合う職員の姿を追った。

岩手県陸前高田市

被災地の今の現実を伝え続ける言葉の橋をかけ続けていきたい。

和合さんの詩は数多くの合唱曲にもなった。歌うことで伝わるものもある。詩が、人々の心に浸透していく。

本当の復興とは誇りを取り戻すこと

被災地は復興へと歩を進めている。だが、道のりはまだ長い。

「外の人は〝震災から1年以上が過ぎ、明るい笑顔も戻ってよかった〟と話をまとめがち。でも三陸の壊滅した港町に人は帰ってこないし、問題は山積しています」

だから、被災地からの発信が必要なのだと和合さんは考える。

「支援の手は、ある時パタリと途絶えるもの。多くの支援を受けて学んだことを我々の文化として築き上げ、橋をかけて伝えなければ。その営みを通してこそ、復興とは何か、まちづくりとは何かということが見えてくる。私は、詩人として言葉の橋をかけていきます」

被災者からの声は、時として実に小さい。話してくださいと言うだけでは、口を開く人は少ない。

「だから行政にはもっと耳を傾けることをしてほしい。マスコミに乗らない多数の思いを、ていねいに耳を傾けて五感で知ってもらいたいですね」

最終的に福島の人々が取り戻すべきは〝土と緑〟だと言う和合さん。草むしりもできない。手についた土はすぐに洗う。子供たちはその現実の中で生きている。

「福島の美しい土と緑を取り戻した時、住む人の誇りも戻るでしょう。それが、本当の復興ということなのだと思います」

和合さんが今もツイッターで発表し続ける詩は、多くの支持を集める。被災地からの思いは、世界に届いていく。

最後に震災1年後の今年3月刊行された『ふたたびの春に』（祥伝社刊）から。

『握手』

握手をしよう
あの日から
変わってしまったこと
少しも変わらないこと
その両方を
お互いの手にこめて
固く
確かめ合おう
僕らの
故郷のしるしを

雲が浮かび
木々が芽吹き
川が流れ
鳥がさえずり
山はゆるがない
やがて
花が咲く

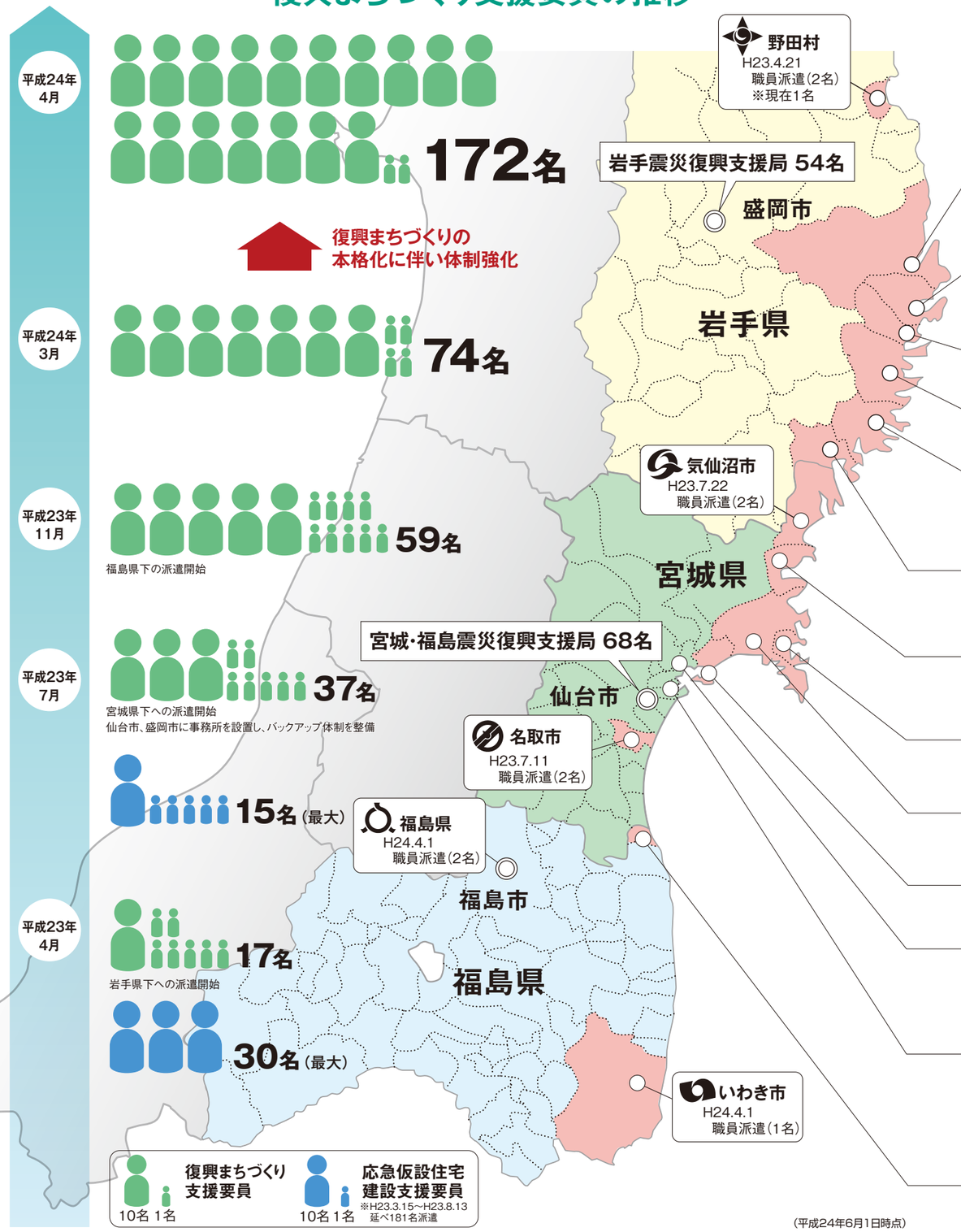
あなたの手は
わたしの手を握る
だから
あなたの手を握ろう
あなたの手を握り返そう

URの復興支援

URが取り組む復興支援

震災直後の応急仮設住宅建設支援など復旧活動に加え、昨年4月からは復興計画策定を支援するため、被災市町村に職員を派遣してきました。現在、13の市町と覚書や協定を締結し、復興まちづくりが本格スタート。現地組織を強化し、約170名体制で全力を挙げて早期事業化を推進しています。

復興まちづくり支援要員の推移



（平成24年6月1日時点）

復興まちづくりの歩みと現状

宮古市
H23.4.21　職員派遣（2名）
H24.4.1　現地組織設置（4名）
H24.4.11　協力協定締結
▶復興市街地整備2地区始動

山田町
H23.4.13　職員派遣（2名）
H24.3.2　協力協定締結
H24.4.1　現地組織設置（4名）
▶復興市街地整備事業2地区始動

大槌町
H23.4.28　職員派遣（2名）
H24.4.11　基本協定締結
▶災害公営住宅事業2地区100戸始動

大船渡市
H23.4.13　職員派遣（2名）※現在1名
H24.3.28　覚書交換

南三陸町
H23.7.22　職員派遣（2名）
H24.4.1　現地組織設置（3名）
H24.5.11　基本協定締結
▶災害公営住宅事業2地区80戸始動

石巻市
H24.1.24　職員派遣（1名）※現在3名
H24.3.10　基本協定締結

塩竈市
H24.2.1　基本協定締結
▶災害公営住宅事業2地区80戸始動

多賀城市
H24.3.30　基本協定締結
▶災害公営住宅事業1地区150戸始動

新地町
H23.11.7　職員派遣（2名）
H24.2.29　基本協定締結
▶災害公営住宅事業1地区30戸始動

応急仮設住宅中間検査

釜石市
H23.4.28　職員派遣（2名）
H24.3.23　協力協定締結
H24.4.1　現地組織設置（5名）
▶復興市街地整備1地区始動
▶災害公営住宅事業1地区15戸始動

陸前高田市
H23.4.28　職員派遣（2名）
H24.3.2　協力協定締結
H24.4.1　現地組織設置（5名）
▶復興市街地整備2地区始動

女川町
H23.7.22　職員派遣（2名）
H24.3.1　パートナーシップ協定締結
H24.4.1　現地組織設置（7名）
H24.5.11　基本協定締結
▶災害公営住宅事業1地区200戸始動

東松島市
H23.7.25　職員派遣（1名）
H24.3.29　協力協定締結
H24.4.1　現地組織設置（5名）
▶復興市街地整備2地区始動

事業着手式（山田町）

現地調査の様子（女川町）

女川

宮城県
Onagawa

地域に寄り添った、真の復興支援を

町の中心部と離半島部の漁村で壊滅的な被害を受けた宮城県女川町。漁村の住民とも交流を重ねながら復興を目指す職員を訪ねた。

まちづくりの新たな目標

「まちづくりというのは、その土地の人々がどんな住まい方をしてきたのか、その文化・風習などを知ることが大切だと思うんです」

そう語るのは、女川町で昨年7月から復興支援に携わる久坂斗了だ。

これまで久坂は関西で、都市再生事業の計画を行ってきた。95年の阪神・淡路大震災の時には、出向先の豊中市で復興事業に携わった経験もある。

「阪神・淡路大震災の時は、道路など街の骨格は残されていたので、再建のために必要なスキームがはっきりしていました。また、都市災害だったのでブレーンも大勢いました。しかし今回は、被災地の多くが漁村集落。都市からも離れており、識者・技術者が少ないことも大きな課題でした」

震災後、それに気付いた久坂は、「自分がやってきたことが、東北の皆さんの役に立つのなら、これも運命」と、被災地に向かった。「人が好きなので」と笑う久坂は新たな目標を見据えた。

伝統や文化を受け継ぐ住まいを

久坂は、町民課で災害公営住宅を担当することになった。着任当初は、人脈も土地勘もなかったため、思うように仕事が進まない。関西時代、たっぷりと経験を積んでいたにも関わらず、根こそぎ骨格が奪われた女川では、まったくケースが違っていた。そこで久坂は、復興の手がかりとなる情報収集を独自に始めることにした。

そんな中で知ったのが、町の東の半島にある竹浦（たけのうら）地区。山の斜面が海に迫り、わずかな平地に62戸の住宅があったが、残ったのはわずか2戸。187人の住民のうち11人が犠牲になったエリアだ。

「竹浦地区を何度か訪ねているうちに、高台に宅地を探しているとか、住民主導で移転や住宅についてのアンケートを取っていると知りました」

興味を持って、竹浦の住民と会話するようになった。久坂がこれまでずっとまちづくりに携わってきた人間だということが伝わり、次第に人々も心を開いてくれるようになったという。

竹浦の港では、地元の漁師が通りかかり、にこやかに久坂と挨拶を交わす。そのうち、仲間たちも自然と集まってきて、賑やかな井戸端会議が始まった。

「役場の肩書きではなかったので、逆に自由に入り込んで意見を聞くことができたのかもしれません。そんな対話を通じて、地元の祭り、行事なども教えてもらったり。それが、住宅やまちづくりのヒントになっているのです」

女川町には行政区ごとに神社があり、それぞれに獅子振りが代々受け継がれている。竹浦の伝統的な民家は、縁側が広く、天井が高い。正月に獅子振りが舞いやすいようにだ。屋根は瓦ではなく、修復中の東京駅の屋根にも使われている石巻市雄勝（おがつ）の天然スレート。これは雄勝名産の硯（すずり）の材料でもある玄昌石からつくられている。

「竹浦地区の災害公営住宅では、雄勝スレートを使いたいと考えて

「番屋」で地元の方の住宅の構想に耳を傾ける久坂

海のほど近くにあるプレハブの「番屋」

かつての女川町中心部には、ビルの残骸が残る場所も

竹浦地区の海岸で、地元漁師と談笑する久坂

屋根・壁にも雄勝スレートが配された雄勝石ギャラリー。この建物も被災し、現在では土台が残るのみ

いるんですよ。文化を残しながら、少しでも住みやすい環境を提供したい、ずっとそう考えています。スレートを使えば、雄勝の産業の再生にも役立てるのではないでしょうか」

地元の人々と識者をつなぐパイプ役に

久坂は女川町を拠点としながら、周辺の石巻市雄勝や牡鹿半島での復興の動きも見ている。牡鹿半島は「アーキエイド」という建築家による復興支援プロジェクトの拠点ともなっており、昨年夏には学生100人を集めたサマーキャンプも。大学教授などの勉強会も開催されており、これも久坂もネットワークを築こうと参加している。

「まちづくりはきっかけが大切。地元の方々、市町村の職員、そして大学教授などの識者を連携させていく、いいパイプ役になれればと思うんです」

久坂はこの4月で定年を迎えたが、引き続き女川町に残りたいと申し出た。知り合った地元の人々と協調しながら、復興を目指したいという気持ちからだ。

「地元に寄り添って生の意見を聞く。まちづくりにおいて、ともすれば忘れがちになる大切なことを、女川町に来て思い起こすことができた気がします。若い須田町長を筆頭に頑張っていきたいですね」

3月1日に「女川町復興まちづくり推進パートナーシップ協定」が調印され、URが包括的に責任を持ってサポートを行う体制が築かれた。4月からは7人に増員し、復興をさらに推進していく。「笑顔あふれる女川町」——復興計画に掲げられた目標に向かって、全力を注いでいく。

須田町長とかっちりスクラムを組む久坂と同僚の鎧（あぶみ・左）

ウニ、アワビ、カキなどの養殖も盛んだった美しい女川湾

Close Up 女川の記憶を次世代に残したい

女川出身カメラマン　鈴木麻弓さん

佐々木写真館3代目、鈴木麻弓さんが父の代役として女川の人々を撮影し始めたのは震災後の4月。母校である小学校の入学式からだった。人生の新しい1ページを記念に残してあげたいと女川へ。その日の子供たちは希望に輝いていた。

鈴木さんは女川町で2代続いた写真館の生まれ。モノクロのポートレート写真が自慢の父の元で育ち、自分もいつしかフリーカメラマンに。故郷を離れ、神奈川県逗子市を拠点に活動していた。そんな中、起こった東日本大震災。写真館は流され、両親は行方不明に。

「店は継がなくていいから、技術だけは継いでくれ」。かつて父から言われた言葉を思い起こし、父の遺志を受け継ぐべく、3代目を名乗る決意をしたのである。以来、逗子と行き来しながら、女川の人々をライフワークとして撮り続けている。

そんな女川の人々や町の風景を文と共に紹介した写文集『女川 佐々木写真館』が3月に出版された。

「この本は町内の新聞販売店にも置いてもらいました。地元の人が買ってくれれば店の収入にもなります。こうして地域の経済を回していくことが大切だと思うんです。記念撮影の依頼も、地元の人たちが払える金額で仕事として引き受けます。20年後の町のあり方を考えるなら、地元の人の気持ちになって、本当に役立つ支援が必要だと思います」

現在は工事関係者やマスコミも大勢女川に来ている。けれども新しい町が完成した後はどうなるのか—。

「私たちの世代が考えなければいけないこと。今、女川の30代・40代は本当に頑張っています。地域の中だけでは経済は成り立たない。港のそばで寿司屋を開いた友人もいるし、安心して買ってもらうため漁港に揚がる魚の放射線量を測定しているカマボコ屋もあります」

phot by Tokufumi Inagaki

Mayumi Suzuki
1977年生まれ。カメラマン。震災後の女川を撮影し、昨年5月、ニューヨークでも個展を開催。
www.monchicamera.com

写文集に登場する人々の表情は驚くほど明るい。

「女川の人は責任感が強くて世話焼き。いつも太平洋を相手にしているせいか、カラッとして前向きなんです」

だからこそ、遠慮は抜きに、観光目的でどんどん訪ねてほしいと鈴木さんはいう。

「魚はおいしいし、根元から倒れたビルもぜひ見てほしい。丘に立てば、こんなところまで津波が来たのかと実感できます。被災時の話をしてくれる人もいますよ」

今、故郷を撮影に訪れるのは月に数回。次の時代へ向かって一歩ずつ立ち上がっていく女川の姿は、将来を担う子供たちにとって貴重な記憶となるに違いない。

漁港近くの水産加工場。
現在はガレキ置き場になっている
©Mayumi Suzuki

海岸近くにあった八百屋を
青空市として再開した岡さん夫婦
©Mayumi Suzuki

写文集『女川 佐々木写真館』
（一葉社）

町長が語る「女川の未来」

誇りと喜びとともに 千年に一度のまちづくりを

女川町長　須田善明さん

UR都市機構は、女川町と「復興まちづくりの推進のためのパートナーシップ協定」を締結し、離半島部を含む女川町全体の復興に向けて、総合的にサポートしていく。「全国一早い復興を」と誓う若きリーダーに、これからのまちづくりについて伺った。

須田善明　すだ よしあき
1972年女川町出身。父は元町長の故善二郎氏。明治大学卒業後、広告会社勤務を経て宮城県議。2011年11月から現職。震災で家を失い、家族4人と仮設住宅住まい。趣味はロック鑑賞でドリームシアターに心酔。バンド活動も行いベースを担当。

将来を担う子供たちへ背中で示したい

「復興に向かう私たちの背中を子供たちに見せていきたいんです。将来は、彼らがこの社会を背負っていくのですから」――そんな決心を胸に、町の未来を見据え、復興に取り組んでいる、女川町長の須田善明さん。

フレッシュで若々しい笑顔。長身でがっしりした体躯から頼もしさを感じさせる、40歳を迎えたばかりの若きリーダーだ。

震災翌日の夜明け前、変わり果てた町の姿を前に、「悲しいとか辛いとか、そんなあらゆる感情を超越していた」。当時、現職の宮城県議選前。評価はどうでもいい。それよりも生まれ育った故郷をどうにかしたいと必死に動いた。

「安住前町長は全国に誇れる町長でした。それでも私が立候補したのはなぜか―。私たちは20年後もここで生きていく。将来にどんな町を残せるか、その復興の一歩目から、批判も責めも将来背負える人間が担っていかなければならないと思ったのです」

一歩ずつ歩み出した復興まちづくり

須田町長の描く町の将来像は、「住みやすく」「訪れやすく」、その結果「住みたくなる」町。高台移転にしても、都市機能が集約されたコンパクトシティを目指す。

「町の中心から1・5km以内に市街地形成が収まります。町の老若男女、観光などで町外から訪れた方々すべての動線が一体となる形を目指したい。また、この美しい女川の景観は私たちの財産。それをただ提供するだけではなく、訪れた人が景観を前に、〝自分で楽しみを創造できる空間づくり〟こそが必要だと思っています」

復興まちづくりも一歩を踏み出した。肉体づくりもまちづくりも基礎が大切。土地の基盤整備は最優先。同時に住まいの早期確保も最重要課題だ。災害公営住宅は町内だけで550から600戸が必要となるが、早期に着手する先行復興エリアの約200戸はUR都市機構が担当する。

職員の心を折らせずベストアンサーを

復興を実現するために、須田町長が日々心がけていることは、職員の士気を保つこと。

「千年に一度の災害というなら、千年に一度のまちづくりなのです。家族や友人、家を失って傷ついていても、行政のプロとして復興に携われる誇りと喜びを感じてほしい。今回の復興は震災からの復興だけでなく、地域のこれまでの課題も含めた復興でなければいけない。我が町女川で、そのベストアンサーを示したいと思います」

バイタリティあふれる須田町長。「一日も早く復興を目に見える形にしていきたい」と熱く語ってくれた。

景観という財産を生かしつつ、〝コンパクトシティ〟を目指す（画像はイメージ）

Close Up 活気を伝える新たな拠点に

おながわコンテナ村商店街

昨年7月にオープンした「おながわコンテナ村商店街」が話題を呼んでいる。震災後、町にはコンビニエンスストアと小さな商店しか開店していなかった。そんな中、女川町商工会青年部が中心となりコンテナで商店街を開設した。現在では8店舗が営業中だ。

組み立て式のコンテナハウスは、NPO法人「難民を助ける会」から提供され、幅6m、奥行き2mほど。果物店、乾物店、洋服店、花屋などが軒を連ね、敷地の中央は椅子、テーブルが置かれたコミュニティスペース。地元の人々はもちろん、女川を訪れたボランティアや作業員の方々なども多数訪れる賑やかな交流の場になっている。

「仮設住宅に入っていても商店がなくて困っている人もいます。売り上げは震災前の1/3程度ですが、コンテナ村のような場は必要ですよ」と語るのは、村長を務める果物店の相原義勝さん。震災前まで、「相喜会」という20年以上続く女川伝統芸能の獅子舞保存会で会長を務めていたが、津波で衣装や道具もすべて流出。19人いたメンバーのうち4名が亡くなった。それだけに、人の心をつなぐ場として、このコンテナ村にかける思いは強い。

「これからは、外から来る人も楽しめるよう、イベントもやっていきたい」という相原さん。賑わいの復興に向けて、着実に歩みを進めている。

「私も今年で65歳。あと5年がんばって、若い人たちにバトンタッチしていきたいね」と村長の相原義勝さん

「今までより結びつきが深くなりました」と"がんばる女川"Tシャツを手にした洋服店の高橋さんと、隣に店を構える乾物店の青木さん

「前進あるのみです」と、花屋さんの鈴木さん。

●おながわコンテナ村商店街
宮城県牡鹿郡女川町鷲神浜字堀切5
営業：AM9:00～18:00

陸前高田 すべては故郷のために、その一心で

岩手県 rikuzentakata

壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市でも2地区で具体的な復興まちづくりが動き出した。強い使命感で復興に向き合う、その姿に迫った。

小田島永和 おだしま ひさかず（右）
小林 章 こばやし あきら（左）
ともに、2011年4月から陸前高田市の復興計画策定支援を担当。

一歩ずつだが一日も早い復興を

「復興計画の策定支援」をミッションに、陸前高田に着いたのは昨年4月28日。当初はとにかく人手が足りない状況で、頼まれることはすべて手伝った。そういうところからのスタートだった。

復興を実現するには、どういう事業手法がベストか、法令上の規制をどうクリアするのか、網羅的な復興計画から現実を見ながら実施可能な事業計画にするにはどうしたらいいか。気が遠くなるほど多くの課題、しかも机上では解けない課題を、関係機関と根気よく交渉を重ねながら、ひとつずつ解決していくことが求められた。

国道一本を計画するだけでも、国や県、警察との細かな協議が不可欠だ。また、ある地区の計画では、1000万㎥の土を山から削って防潮堤や盛土に使うという話も出ているが、これまでの経験上の数字では年間100万㎥が限界。これだと10年かかる計算だ。

「仮設住宅に入っている方に10年待てとは言えません。現実を踏まえながら、いかに早く事業が進められるか、常に考えています」

3月2日には、市とURの間で復興事業の推進に関する協力協定が結ばれ、責任ある立場での発言が可能になった。復興事業の中心となる、高田地区と今泉地区では、測量やボーリング調査も始まった。

いま、小田島を支えているのが、故郷の1日も早い復興への願いだ。

「早く元の暮らしを取り戻してほしいという気持ちでいっぱいです。市役所の皆さんは自身も被災されているのに、私たちを引っ張ってくれて、逆に励まされています。陸前高田の皆さんとは強い縁を感じています。この気持ちを大切にしながら、これからも一緒に頑張りたいと思います」

4月からは5名体制となって、これからが新たなスタートライン。陸前高田のシンボル「奇跡の一本松」さながらに、力強く復興支援を推し進める。

陸前高田市役所

復興のシンボル、高田松原の「奇跡の一本松」

これまでのキャリアは復興のために

「故郷のために何かしたい。その一心でした」

盛岡出身の小田島永和は、東京都心部の区画整理事業を担当していたが、故郷への強い思いから被災地への派遣を希望した。

大学では建築・都市計画を専攻。入社してニュータウン開発や既成市街地の区画整理事業に携わり、災害復旧や不動産取引のノウハウも得た。小田島は自分にできることは何かと考えたときに、これらすべてが震災復興に役立つことに気付いた。

「これまでニュータウン開発に10年、都市再生に10年、そしてこの先10年は復興のために。自分のキャリアは復興のためにあったのかとさえ思いました」

盛岡が地元だけに岩手県庁に知り合いも多い。陸前高田には高校時代に部活動の合宿で訪れたこともあり土地勘もある。そして方言もわかる。小田島を取り巻くすべてが復興にプラスになると考えた。

小田島の妻は釜石出身。震災の2週間後にはリュックを担ぎ、単身で支援に向かったという。そんな妻の行動力にも大きな刺激を受け、「故郷のために」と決意を固めた。

いまだ、がれきが残る被災地

大槌

岩手県 otsuchi

まちづくりのプロとして第一線で支援したい

多くの犠牲を出した岩手県大槌町でも町内2地区（約100戸）で災害公営住宅の建設事業が始動した。奮闘する2人を訪ねた。

わき上がるプロの使命感

「これはとんでもないことになった」。更地同然の町に初めて足を踏み込んだとき、渡邊正彦はあぜんとしてつぶやいた。テレビの報道で見ていた光景とははるかに異なる現実が広がっていた。同時に、〝まちづくりのプロ〟としての熱い思いがわき上がった。

「震災後の4月から、URのスタッフが、岩手県の沿岸市町村に派遣されていることは知っていました。自分も何かできるはずだ、やらねばならないという気持ちが募ってきたのです」

渡邊はこれまで担当した事業でも、関係者とひざ詰めで交渉する経験を数多く積んできた。いわば第一線の現場のベテランだ。

阪神・淡路大震災の時には、建物の応急危険度判定を行った経験もある。しかし、その時より、さらに強い思いに突き動かされた。

関西勤務だった北村孝一にも、支援に参加してほしいとの要請が寄せられた。「これまで培ってきた経験が役に立つなら」と決心した。

北村もまた、阪神・淡路大震災の支援を経験している。関西を中心にニュータウン開発を手がけてきたベテランだ。

槌音が響き これからが本番

昨年7月に赴任した2人は、まず、浸水した地域を歩き回り、地図に色分けしながら、どこまで水が上がってきたかを確認した。地味で時間がかかる仕事だが、復興には欠かせない重要な資料となる。

さまざまな仕事に追われる中、自分たちで気になる場所があれば足を向け、いつでも助言できるように日頃からアンテナを張り巡らせた。「どんな疑問や質問にも対応できる臨機応変さこそが、プロの仕事」だと考えていたからだ。

現在、大槌町の仮庁舎には、全国からの支援スタッフが集まっており、その数も数十名を超える。4月11日にはURによる災害公営住宅建設事業も始動した。

「現在、地元の意思確認を行う段階に入っています。ようやく復興へ向けての具体的な一歩を踏み出しました」

被害の大きかった赤浜、町方、吉里吉里など海岸線エリアの地権者との交渉がスタート。役場スタッフを中心とした根気強い話し合いが進められている。そして、ボーリング、測量調査など、現場での槌音も響き始めた。これからが本番だ。

「〝まちづくりのプロ〟として、第一線で思いきり力を発揮したい」。渡邊はそう胸を張った。

渡邊正彦 わたなべ まさひこ（右）
北村孝一 きらむら こういち（左）
ともに、2011年7月から大槌町の復興計画策定支援を担当。

震災から一年。献花台が備え付けられた旧大槌町役場

Close Up 地元の個性を生かし、「食」から復興を

おらが大槌 復興食堂　岩間美和さん

「被災して仮設住宅で暮らす方も、ここに来れば誰かに会える。そんな人と人とのふれあいの場なんです」と語るのは、「おらが大槌 復興食堂」店長の岩間美和さん。震災後に結成された観光・産業の再建を「目指す一般社団法人「おらが大槌夢広場」が開設した食堂で、岩間さんもそのメンバーの一人だ。以前は、水産加工会社に勤務していたが建物は流失。経験を生かし、食の面からの再興を目指している。

「復興食堂」の人気メニュー、ご飯の上に鮭の身とイクラを乗せた「おらが丼」（800円）もかつての大槌町の名産をアレンジしたもの。これは地元の料理人と共に開発した。

11月のオープンから半年。「目標は“食と地域”の絆づくり。確実に前進していますよ」と手応えを語る。地元の個性を生かし、力を合わせ復興へ向かう、大槌町の底力が垣間見えた。

店長の岩間美和さん

●おらが大槌 復興食堂
岩手県上閉伊郡大槌町上町6-3
TEL.0193-55-5120
営業時間／11:00～15:00（昼）、17:00～21:00（夜）
定休日／月曜
http://oragaotsuchi.web.fc2.com/

塩竈

宮城県
Shiogama

新たな生活の舞台に多くの思いを込めて

4533戸が全半壊した宮城県塩竈市。一日も早い災害公営住宅の建設に向けて、急ピッチで事業を進めている。現在の状況をレポートする。

明治時代、佐浦山の花見風景。踊りなどのアトラクションもあった
（写真提供：佐浦弘一氏）

春には桜が咲き誇る鹽竈神社

歴史に学ぶ住まいづくり

塩竈市の歴史は深い。切り込んだ入り江の近くには、奥州一之宮として東北一帯の崇敬を集めてきた鹽竈（しおがま）神社があり、伊達政宗ゆかりの名刹も残る。

「単に住宅を作るだけではなく、その土地の歴史や文化を守り、地域に溶け込んだコミュニティ形成の手助けをすることが私たちの役割です」

そう語るのは、宮城県、福島県下の災害公営住宅の建設支援を担当する永井正毅。昨年10月から塩竈市と協議を進め、市内数カ所で計画されている災害公営住宅のうち、2月に2カ所の建設要請を受けた。現在は測量や地盤調査ののち、設計段階に進んでいる。

西塩釜駅から約5分の場所にある錦町地区。佐浦山と言われ、鹽竈神社の御神酒「浦霞」で知られる佐浦酒造の蔵元・佐浦家所有地だったが、地元のためにと提供された。駅からも近く仙台方面への通勤にも便利。病院や市役所も近いので、子育て中のファミリーにも安心だ。3棟の集合住宅が計画されているが、敷地は不整形で高低差もある。しかも鉄道隣接という難しい条件だ。

佐浦山には佐浦家の別荘があり、戦前、春には数十本もの桜が咲き誇った。そこを地元の人々にも開放して花見が大々的に行われたという、地域に開かれた場所。鹽竈神社一帯に咲く桜は今も、多くの観光客を集める。

「そうした歴史に学び、敷地には復興のシンボルとして桜をたくさん植樹します。敷地内の公道は、近隣の方にとっても駅への近道。花や緑、ベンチも設けて、地域の皆さんが自由に憩える、賑わい空間にしたいですね」

これまでの経験から工夫を引き出す

元々戸建ての持ち家に住んでいた被災者の多くは、戸建てに住むことを希望する。それに応えるかたちで、伊保石地区では39戸の戸建住宅が計画されている。高台の新興住宅地の中にある貸し農園が建設用地として提供された。

建設地は既存の住宅地と幼稚園の間にあるので、両者を結ぶ道を作り、誰もが通り抜けられるようにする。また、公営住宅エリアにも新しい集会所を建て、地域の既存集会所とともに、周辺の人々にも活用してもらう。

「エリア内の6m道路は、敷地との間に芝生を植えて公園のようにします。皆が立ち話などできれば、子供たちの見守りにもなると考えました」

公営住宅は市が管理することになるが、集合住宅に比べて戸建住宅地を管理するのは難しい。将来的に市が払い下げることも想定し、住み手に合わせて改変できる家が必要となる。中越地震の際、山古志村で建設された戸建ての災害公営住宅の例に学び、吹き抜けに床を張ったり、増築したりして部屋数を増やせる工夫も取り入れた。

塩竈市には、震災後に長野県須坂市から多くのカンナの花が寄贈された。その感謝の気持ちを込めて、カンナの道を作るプランも生まれた。

ただ住宅を作るだけではなく、歴史、経験、思い、希望、たくさんのものを計画に詰め込んで、新たな生活の舞台を築くのだ。

「住まいの再建は復興に向けての第一歩。1日でも早く入居していただけるようチーム一丸となってがんばっています」と永井。地域の人々の期待の声が、大きな励みだ。

永井正毅 ながい まさたけ
宮城県、福島県下の災害公営住宅の建設支援の責任者。

Close Up 桜咲く佐浦山に、賑わいをふたたび

株式会社佐浦　佐浦弘一 さん

日本酒「浦霞」で知られる佐浦酒造は、鹽竈神社の御神酒酒屋として288年続く酒蔵だ。現社長の佐浦弘一さんは13代目。江戸時代末期から明治初期に建てた「享保蔵」、大正時代の「大正蔵」、平成に入って東松島市に建てた「矢本蔵」の3つの蔵で酒を醸す。

震災の時は蔵の壁が剥落（はく）し、敷地は胸下まで浸水した。ライフラインも停止したため、発酵中の酒の中で商品化できたのは一部だけだったという。そんな中、佐浦では被災後、酒の移送用のタンクローリーを使い、給水活動も実施。また、地域のカキなどの養殖漁業復興のため、フォークリフトや機材を提供してきた。

「鹽竈神社を中心に歴史を重ねてきた塩竈は、何かかあれば助け合う、結束の強い地域です。それに日本酒は食と密接に関係する。地域の食文化の復興に役立てばと考えました」と佐浦社長は振り返る。

錦町地区の佐浦山と呼ばれる佐浦家の所有地を災害公営住宅用地として提供したのも、地域の復興を願ってのことだった。

「すり鉢状の地形の塩竈に、空き地が少ないのは明らかでしたから。戦前まで桜の時期には地元の人を大勢招いた場所です。活用してもらい、地域の賑わい復活につながればうれしいです」

佐浦家には、塩竈で災害のあるたびに復興に尽力してきた歴史がある。慶応の大火で焦土となった時は、持ち山の杉を住宅用に寄付した。明治時代には9代目当主の佐浦茂登が、田を埋め立てて宅地を造成した。今の佐浦町だ。佐浦山に別荘を建てたのはその頃。春には数日間にわたる花見宴会を催し、地域の人を楽しませた。

「そうした先祖たちに比べると、震災後の私共の活動はまだまだ十分とはいえません。地元で長く続けてこられたのは地域社会あってのことです。塩竈のために何をしていけばいいか、これからも考えていきます」

佐浦山には、今も幾本かの桜が残る。災害公営住宅の建設とともに敷地には数十本の桜も植樹される予定だ。

「佐浦山の桜が再生すれば、またお花見ができますね。地域の人が集まる場所になるかもしれない。楽しみです」

花の下で傾ける「浦霞」の味も、きっと格別だ。

漆喰の土蔵と石蔵が並ぶ敷地にはショップ「浦霞酒ギャラリー」があり、猪口を購入すれば試飲もできる。県内作家の酒器も展示

●株式会社佐浦
宮城県塩竈市本町2-19
TEL.022-362-4165
http://www.urakasumi.com/

UR information

URからのお知らせ

Topic 第7回都市再生フォーラム「防災まちづくり」を開催しました。

6月15日、東日本大震災被災地における復興まちづくりと、今後の防災まちづくりをテーマにフォーラムを開催しました。当日の模様はホームページでご覧になれます。（近日公開予定）

パネリスト
中林 一樹
明治大学
政治経済学研究科
特任教授

基調講演・パネリスト
大西 隆
東京大学工学系
研究科教授
日本学術会議会長

パネリスト
中井 検裕
東京工業大学
社会理工学研究科
教授

基調講演・パネリスト
野田 武則
釜石市長

パネリスト
福屋 粧子
東北工業大学
工学部講師
福屋粧子建築
設計事務所代表

コーディネーター
山﨑 登
NHK解説副委員長

都市再生フォーラム で 検索

http://www.ur-net.go.jp/forum/

Topic 「UR PRESS」Web版もお楽しみください！

「UR PRESS」のWebサイトは内容も盛りだくさん。インタビューにご登場いただいた坂茂さんや、復興に向けて取り組む人々の動画も掲載。読者アンケートプレゼントも実施中です。ぜひ、サイトをご覧ください。

イメージ

UR PRESS で 検索

http://www.ur-net.go.jp/publication/web-urpress/

「おながわコンテナ村商店街」のTシャツをプレゼント

今号の特集で訪れた女川町。「おながわコンテナ村商店街」で購入した、特製Tシャツを5名様にプレゼント。背にプリントされた“おだつなよ津波!”というフレーズ（「おだつ」とは地元の言葉で「調子に乗る」などの意）も印象的なTシャツで、サイズはL、色は黒のみ。本誌挟み込みのアンケートハガキか「UR PRESS」Web版からご応募ください。

編集後記

東日本大震災から一年余り。今号は「震災復興特集号」として、UR都市機構の被災市町村での復興支援の現状を中心にお届けしました。地元で復興に向けて活動されている方のコラムや特別インタビューなど、現地取材を中心に、できる限り「被災地の実情」を詳しくお伝えできるよう編集しました。たくましく咲き誇る表紙の桜のように、前向きなメッセージをお届けできたら幸いです。

地域に寄り添いながら、一歩ずつ前へ―。長い道のりになりますが、一日も早く復興への槌音を響かせ、希望の灯をともすために、私たちUR都市機構も全力を挙げて復興まちづくりを進めていきたいと思います。

季刊「ユーアールプレス」
Vol.29（2012年6月）

発行　独立行政法人都市再生機構
〒231-8315　神奈川県横浜市中区本町6-50-1
横浜アイランドタワー
Tel. 045-650-0881
Fax.045-650-0889
編集・制作　（株）日本経済社
印　刷　（株）大分アロー印刷